

## 第十章 第一週——割当額戦争

三週間という短い期間に、われわれは、よりましな人間になることによって、より良い世界を創ろうとしていた。

フレッド・ヴァインマン

われわれは、外部世界から完全に遮断されたホワイト山脈のこのとても美しい窪地に、置き去りにされたようだった。

ジョージ・ボルトン<sup>(1)</sup>

一九四四年七月の初めに一般の観光客がマウント・ワシントン・ホテルを訪れたとしたら、圧倒されるような光景を目にしただろう。「会議が、いたる所で常に進行中であつた」とある観察者は書いている。「大会議では正式なスピーチがなされ、中規模の会議では、代表団員たちが上着を脱いでやや寛いでいた。そして、ロビーでの二人による非公式の協議では、やや声を荒げ、互いに指を相手に向けて上下に振っている。ここでは知的レベルの高いスタッフが仕事をしていた」<sup>(2)</sup>。

今述べたのは、会議の様子を説明する一つの仕方であつた。別の見方は、ジョージ・ボルトンが書いたように全くの混乱であつた。「これ以上はないだろうと思われるほど、あちこちで混乱がみられる」と早くも会議開始の数日後に書いている。ケインズが予言した「途方もないモンキーハウス」たけなわであつた。

代表团が到着してわずか数時間後には、建物は継ぎ目にガタがきているように見えた。「不注意で足に二スガ付かないように玄関口には厚紙が敷かれ、ペンキの入った缶がまだいたる所に残っていた。そして、二つの大きな水泳プールは、ライトブルーのペンキが塗りたてで、てかてかと光っていた」<sup>(3)</sup>。ホテルの支配人は仕事を放り出して酔っ払っていたので、財務省が独自に代わりを任命した<sup>(4)</sup>。

世界中の記者たちがホテルに向かって進んでいた時、アメリカのある編集者は、「ここは、殺人にもってこいの場所だ」とその時の感想を伝えている<sup>(5)</sup>。彼は的を射ていた。一番近くの町から三六キロメートル以上も離れていて、電話や電気は調子が悪く、よく故障する。人里から離れた、そのような状態の巨大な老朽化した建物に、お偉方が集まっていた。代表团の多くが数十年にわたって築かれてきた憎しみを抱いていた。彼らはほぼ三週間にわたって一緒に缶詰めになり、(少なくとも経済的な意味で)多くを勝ち取り、あるいは、失うことになる。「ニューヨークの」ブロードウェイでちょうど公演が始まった、アガサ・クリステリーの殺人推理劇『十人の小さなインディアン』<sup>\*</sup>との類似を話したくなるのも無理はないだろう。

もちろん、それはジャーナリスト側の全くの甘い考えであった。殺人が一件か二件起れば、少なくともそれは新聞の一面に記事を割り込ませるのに役立つだろう。新聞の一面は、例えば、ドイツがフランスに対する支配を失い始めたのを受けてパリで暴動が発生、ノルマンディーの奥深くに連合軍が侵攻、攻略したローマで翻る星条旗など、もっと分かりやすい種類の記事で占められていた。欧州における戦争では勝利を収めつつあったが、ロンドン上空に飛来する飛行爆弾に関する記事が依然として時々見出しに掲載され、不安を抱かせた。

戦時協力であれ、あるいは、シカゴでのルーズベルトの民主党大会の前宣伝であれ、概して関心は他の事に向けられていたので、ブレトンウッズで起こったことのはほとんどは、新聞の内側の経済欄に限定されるこ

とになった。国際通貨史で最も大胆な一つの行動が、世界のほとんどの人々から遠く離れたところで起こされようとしていた。会議が、できる限り当たり障りのない、専門的で退屈なものにみえることを望んでいたハリー・デクスター・ホワイトにとつて、これは好都合であった。彼は、直観に反するような対応策を採った。ジャーナリストが望むものは全て与えることにしたのだ。

それまでの（また、その後の）ほとんどの首脳会談と全く違っていたのは、ブレトンウッズ会議の最初の月曜日にホワイトが記者たちに、今後の一九日間にわたり情報入手の便宜をこれまでに例のない程図ると発表したことであった。記者たちは、五〇〇を超える通知や文書、記者発表を浴びせられることになる。彼らは、小委員会や非公式の会談を除いて、成り行きの全てを観察することを許された。また、誰から話を聞いてもよいと言われた。

ケインズや他国の代表の多くに衝撃を与えたホワイトの目論みは、部分的には、一九四三年のホットスプリング会議に対するメディアの敵対的な反応への反省から採られた措置であった。その時は、ジャーナリストにあまり事情を知らせなかった。ホワイトは次のように判断した。「記者たちは、情報を与えられることによって、問題をより一層知性的に扱うことができるようになり、代表団を煩わせることは大幅に少なくなるだろう。それがどれほどうまくいくかは分からない。広報担当者の話から、これが新しい試みであると理解している」。

その結果、会議の報道は驚くほど確かな情報に基づいていた。議論された全ての条項や、公式な交渉が

\* この劇は、その頃『そして誰もいなくなった』と改名されて、ブロードウェイのブロードハースト・シアターで一九四四年六月二七日に興行が始められた。興行は一年あまり続いた。

辿った全ての展開がこと細かに報道された。一方、相手の同情を得ようとして行う感情的で芝居がかった物言いの多くは、非公式の場でなされていた。それは、会議の真に劇的な瞬間は、最後の日々に泡立って溢れ出すまで、幕の後ろに隠されていることを意味した。

ホテルは、七三〇人の参加者に加えて五〇〇人のジャーナリストの世話をしなければならなかった。ジャーナリストがテラスの椅子で居眠りをしたり、バーやレストランでたらふく飲み食いしたりする姿がしばしば目撃されることになった。彼らは、九・六キロメートル下ったところにあるツイン・マウンテン・ホテルに泊まっており、そこはまだ水道が引かれておらず、食料もなかった。<sup>(7)</sup> こうした「大勢の代表団やジャーナリストが常に同じホテルにいるという」状況であったから、会議の大物が部屋を出ると、仲間の代表が苦情を言うために詰め寄ってきたり、あるいは、好奇心の強いジャーナリストが送稿すべき新聞種を求めて詰め寄ってきたりすることは避けられなかった。リディアは夫についてこう書いている。「メイナードは、ある場所から別の場所に移動する時、ちよつと話をしようといつも呼び止められる」。<sup>(8)</sup>

代表団やジャーナリストの他に、メイドやコックからペンキ屋、配管工、電気工に至るまで総勢四〇〇人余りのホテルの常勤スタッフが、気前の良い代表団員からチップを貰おうとして、そこら中にうようよしていた。どういふわけかチップに物惜しみをするという評判を得ていたケインズは、ある従業員に葉巻用パイプを与えた。<sup>(9)</sup> 従業員には、一般的な修理を行うために徴用されていたドイツ兵捕虜の集団さえもわずかではあったが含まれていた。寝室が相部屋になるのはまだ運がいい方であり、アメリカ人事務局員は牛舎やガレージで寝なければならなかった。

イギリス代表団のあるメンバーは、「わが国は、戦後に行われる会議の主催地がイギリスになるのは当然だと主張してもよかつた。しかし、単にホテルを手配できないという理由でその権利を手放したのだ」それ

なのに、このあり様は何だ」と書いてある。

それでも、アトランティックシティの暑さの後に味わうニューハンプシャーの温和な気候は心地よく、ほっとする思いだった。ある記者は「涼しく、気持ちが良い。ここは、山の城壁に囲まれた静かな草原で、神々が憩う庭だ」と伝えた。<sup>(10)</sup>「涼しくて爽やかだ」とアメリカ代表団員のオスカー・コックスは日記に書いている。「このような気候の中で眠ることができるのは素敵だ。一日だけでもぐっすり眠れば、誰もが生まれ変わったようになるだろう」<sup>(11)</sup>。

最初の数日は、本格的な仕事ではなく主に「大げさな開会式」で占められていたので、代表団の多くは久々の骨休めをした。水泳プールの傍らで日光浴をしてのんびりする者や、二つあるゴルフコースでプレーをする者もいた。また、森の登山道をハイキングする者もいた。マウント・ワシントンの山荘の管理人で世捨て人のようなジミーは、ある日、見慣れない様子の男たちの一団が上から歩いて降りてくるのを見つけた。日本人スパイだと思つた彼は、猟銃を構えて彼らに迫つた。ジミーは「最初は、撃つてから問いただすか、日本前問いただすべきか迷いました。しかし、先に問いただすと決めて正解でした。——彼らは中国代表団の一行で、ハイキングから戻ってきたところだと分かつたからです」と回想している。<sup>(13)</sup>

ホテルの下方を流れているアモヌーサク川を堰き止めて作られた池が釣り場となっていて、マスが泳いでいるのを見ることができた。他の代表団員たちが大いに当惑したのは、リディアが毎朝そこまで歩いて降

\* 一九二〇年代にケインズが休暇でアルジェーに滞在した時のことをスキデルスキーは次のように伝えている。「靴磨きの少年にチップを与えた。もつとくれという要求をはっきりと断り、「私はお金の価値を減じようなど人間ではない」と言つた」。Robert

Skidelsky, *The Life of John Maynard Keynes*, London, 2000, p.304.

りて行き、服を脱いで、冷たい水の中で泳いだことだ。厳格なニューイングランド人にはそのような行為は衝撃的であつたかもしれないが、ケインズ夫人にとっては日常茶飯のことであつた。彼女は、中高年になつた時でさえ、公道の歩道から数メートルしか離れていないティルトンの私邸で裸になつて日光浴するのを習慣としていた。「通りがかりの人は、目を疑つたことだろう」とケインズは書いている。

リディアの奇行は、早朝の沐浴だけではなかつた。会議を通じて、彼女は最も話題として取り上げられる人の一人となる。彼女に魅了されたフィラデルフィア・インクワイアラー紙の記者はこう書いている。「髪の毛の長いロシア生まれのケインズ夫人は、小柄で神秘的なほどはつらつとしており、情熱的だ。……新ギリシャ風ドレスを着て歩き回り、夫が適切に世話をされるように注意深く気を配つていた」<sup>(14)</sup>。髪やドレスでリディアを見つけることができなければ、はつきりと目立つ他の手掛りは、彼女がどこへでも持っていく、麦わらで編んだ買物バッグだつた。バッグには「セネット魚屋、ケンブリッジ」という印がしっかりと付けられていた。<sup>(15)</sup>「リディアとバッグは、多くの大物代表よりもずっと大きな注目を集めた」と他の記者は書いている。<sup>(16)</sup>

イギリス代表団員の妻たちは、リディアにそれほど魅力を感じなかつた。彼女たちから見れば、リディアの風変わりな服の選択や自由奔放な行動は、イギリスの淑女にふさわしくなかつた。ましてリディアの家事のやり方については言うまでもなかつた。キャサリン・リーは、大蔵省代表団員である夫のフランク・リーと共にケインズ夫妻のスイートに招かれた日のことを次のように思い返している。彼女がリディアと入つた部屋には、リディアが洗面台で洗つた靴下や下着がびしょ濡れのまま暖房機の上に吊り下げられていた。<sup>(17)</sup>

リディアも、団員の婦人たちのご機嫌を取ろうとはしなかつた。代表団の多くが遅くまで引き続き会議をしている時に、リディアは毎晩、寝室でバレエの練習を行うことを習慣にしていた。その真下のスイートに